鯉魚

岡本かの子

一

京都の嵐山（あらしやま）の前を流れる大堰川（おおいがわ）には、雅（みや）びた渡月橋（とげつきょう）が架（かか）っています。その橋の東詰（ひがしづめ）に臨川寺（りんせんじ）という寺があります。夢窓国師（むそうこくし）が中興の開山で、開山堂に国師の像が安置してあります。寺の前がすぐ大堰川の流で「梵鐘（ぼんしょう）は清波を潜（くぐ）って翠巒（すいらん）に響（ひび）く」という涼（すず）しい詩偈（しげ）そのままの境域であります。

開山より何代目か経（た）って、室町時代も末、この寺に三要という僧（そう）が住持をしていました。

禅寺（ぜんでら）では食事のとき、施餓鬼（せがき）のため飯を一箸（はし）ずつ鉢（はち）

からわきへ取除(とりの)けておく。これを生飯(さば)と言うが、臨川寺ではこの生飯を川へ捨てる習慣になっていました。すると渡月橋上下六町の間、殺生(せっしょう)禁断になっている川中では、平常から集り棲(す)んでいた魚類が寄って来て生飯を喰(た)べます。毎日の事ですから、魚の方ですっかり承知していて、寺の食事の鐘(かね)が鳴るともう前の淵(ふち)へ集って来て待っています。

　淵の魚へ食後の生飯を持って行って投げ与(あた)える役は、沙弥(しゃみ)の昭青年でありました。年は十八。元は公卿(くげ)の出ですが、子供の時から三要の手元に引取られて、坐禅(ざぜん)の学問を勉強しながら、高貴の客があるときには接待の

給仕に出ます。髪（かみ）はまだ下（おろ）さないで、金襴（きんらん）、染絹（そめぎぬ）の衣、腺病質（せんびょうしつ）のたちと見え、透（す）き通るばかり青白い肌（はだ）に、切り込（こ）み過ぎたかのようなはっきりした眼鼻立（めはなだ）ち、男性的な鋭（するど）い美しさを持つ青年でした。寺へ引き取られたこどもの時分から、魚に餌（え）をやりつけているので、魚の主なものは見覚えてしまい、友だちか兄弟のように馴染（なじ）んでしまっていました。

　五月のある日、しぶしぶ雨が降る昼でした。淵の魚はさぞ待っているだろうと、昭青年は網代笠（あじろがさ）を傘（かさ）の代りにして淵へ生飯を持って行きました。川はすっかり霧（きり）で隠（かく）れて、やや晴れた方の空に亀山（かめやま）、小倉山（おぐらやま）の松（まつ）の

梢(こずえ)だけが墨絵(すみえ)になってにじみ出ていました。昭青年がいま水際に降りる岩石の階段に片足を下ろしかけたとき、その石の蔭(かげ)になっている岸と水際との間の渚(なぎさ)に、薄紅(うすべに)の色の一かたまりが横たわっているのが眼に入りました。瞳(ひとみ)を凝(こ)らしてよく見ると、それが女の冠(かぶ)るかつぎであることが判(わか)り、それを冠ったまま、娘(むすめ)が一人倒(たお)れているのが判りました。昭青年は急いで川砂利(かわじゃり)の上へ飛び下り、娘の傍(そば)へ駈(か)け寄って、抱(だ)き起しながら

「どうしたのですか」

と訊(き)くと、娘は力無い声で、昨日から食事をしない

ので饑えに疲れ、水でも一口飲もうと、やっと渚まで来たが、いつの間にか気が遠くなってしまったというのでした。

「それじゃ、幸い、ここに鯉にやる生飯があります。これでもおあがりなさい」

鉢を差し出してやると、娘は嬉しそうに食べ、水を掬って来て飲ませると、娘はやっと元気を恢復した様子、そこで娘の身元ばなしが始まりました。

応仁の乱は細川勝元、山名宗全の両頭目の死によって一時、中央では小康を得たようなものの、戦禍はかえって四方へ撒き散された形となって、今度は地方地

方で小競合（こぜりあ）いが始まりました。そこで細川方の領将も、山名方の領将も国元の様子が心配なので取る物も取りあえず京都から引返すという有様。

ここに細川方の幕僚（ばくりょう）で丹波（たんば）を領している細川下野守教春（しもつけのかみのりはる）も、その数に洩（も）れず、急いで国元へ引返して行きました。教春の一人娘早百合姫（さゆりひめ）は三年前、京都の戦禍がやや鎮（しず）まっていたとき、京都滞陣（たいじん）の父の館（やかた）に呼び寄せられ、まだ十四歳（さい）の少女であったが、以来日々、茶の湯、学問、舞（まい）、鼓（つづみ）など師匠（ししょう）を取って勉強していました。今年十七の春父が急いで国元へ引返す際、彼（かれ）はすぐに騒（さわ）ぎを打ち鎮めて京へ帰れる見込みで、

留守の館には姫の従者として男女一人ずつ残しておきました。もっとも生活費は剰るほど充分残して行きました。

ところが、それからだんだん国元の様子が父に不利になって来て、近頃ではまるっきり音沙汰もありません。噂には一族郎党、ほとんど全滅だとの事です。すると、早百合姫に附添っていた家来の男女は、薄情なもので、両人諜し合せ、館も人手に売渡し、金目のものは残らず浚ってどこかへ逃亡してしまいました。

父の行方の心配、都に小娘一人住みの危うさ、とうとう姫も決心して国元へ帰ろうとほとんど路銀も持た

ずただ一人、この街道を踏み出して来たのでした。しかし、旅支度さえ充分でない上にすぐと悪漢達に追いかけられたりして、姫は全く不安と饑えとで、疲れ果ててしまったのでした。

姫は言い終ってさめざめと泣きました。

「せっかく、救けて頂いたようなものの、行先の覚束なさ、途中の難儀、もう一足も踏み出す勇気はございません。いっそこの川へ身を投げて死にとうございます」

またさめざめと泣き続けます。昭青年はこれを聴いて腸を掻き毟られるような思いをしました。そして、

彼女を救う一番いい方法は、寺へ頼んでしばらく国元の様子の判るまで置いてもらうことだと思いましたが、乱世の慣わし、同じような悲運な事情で寺へ泣付いて来る者がたくさんあって、それをいちいち受容れていたのでは寺が堪りません。まして女人の身、いっそう都合が悪いのです。寺で断られるのは知れ切ったこと。

しかたなく昭青年は言いました。

「まあ、生きておいでなさい。どうにかなりましょう。食事は私が粗末ながら運んで来ますから、しばらくこの辺のどこかに忍んでおいでなさい。人に見付からぬように」

昭青年だとて、先にあてがあるわけではありませんが、差当って今の取り做（な）し方としては、これ以外に無かったのでした。あたりを見廻（みまわ）すと、幸い、苫（とま）で四方を包んだ船がある。将軍が大堰川へ船遊びの際、伴船（ともぶね）に使う屋根船で、めったに人の手に触（ふ）れません。昭青年は苫を破り分けて早百合姫をその中へ入るよう促（うなが）しました。

姫はさほど有難（ありがた）いとも思わぬ様子でしたが、それでも嫌（いや）とは言わず、船の中へ隠れました。そして言いました。

「淋（さび）しいから食事の時以外にもなるたけ、ちょいちょ

い訪ねて来て下さいましね」

二

寺の人達の間にこんな噂が出るようになりました。

「どうもこの頃、昭沙弥は、生飯をやると言っちゃ日に五六遍（ぺん）も、そわそわ川へ行く。あんまり鯉に馴染（なじみ）がつき過ぎて鯉に魅（み）せられたのではないか」

「その癖（くせ）、淵の鯉は、斎（とき）の鐘を聴いてもこの頃は集って来んようだ。わしは気を付けて行って見るが確かにそうだ」

「それは変だな」「変だ」「変だ」と噂し合うようになりました。それはそのはずです。せっかくの生飯も、昭青年は苫船の中の美しい姫にやってしまうので、淵の鯉は、いつも待ち呆けです。しまいには諦めて鯉達は斎の鐘に集らなくなりました。噂が耳に入るほど余計に昭青年は用心します。隙を覗い折を見ては苫船へ通います。その度に自分が貰った菓子、果物など、食べた振りをして袖に忍ばせ、姫にそっと持って行ってやります。そうこうするうち日も移って、梅雨もすっかり明けた真夏の頃となりました。

　片方は十八の青年、片方は十七の乙女。二人は外界

をみな敵にして秘密の中で出会うのです。自然と恋が芽生えて来たのも当然です。

姫はもう何もかも考えなくなって、ひたすら昭青年の来るのを待ち侘びている。自分では、ただ頼みにする人、有難い人と思っている積りだが、心の底ではもう恋が成熟しきっている。その証拠には、われ知らず、男の心を試すような我儘を言い出すようにもなりました。

一方、昭青年は早く機会を見付けて何とか始末をしなくては、悟道の妨げにもなるし、姫のためにもよくない。刻々、そう思いながら、その気持ちに自分で自

分に言いわけを拵（こしら）えて、ずるずる現状のままを持ち続けています。時には自分で腑甲斐（ふがい）無いと思えば思うほど「ええ、何もかもおしまいだ、姫と駆落（かけおち）でもしてしまおう」こんな反動的な情火がむらむらと起るので、自分ながら危なくて仕様がありません。これはいっそ、そっとこのままにしておいて時の捌（さば）きを待つよりしかたがないと、思い諦めて、楽しいようなはかないような逢瀬（おうせ）を続けています。

昼過ぎ、昭青年は姫に生飯を持って行って食べさせたあと、二人は川へ向いた苫を少し掻き分けて、対岸の景色を眺（なが）めていました。蟬時雨（せみしぐれ）は、一しきり盛（さか）りに

なって山の翠(みどり)も揺(ゆ)るるかと思われる喧(やか)ましさ、その上、あいにくと風がはたと途絶えてしまったので周囲を密閉した苫船の暑さは蒸されるようです。姫は汗(あせ)を袂(たもと)で拭(ぬぐ)いながら言いました。

「あたくし、久しく行水しないから、この綺麗(きれい)な水へ入って汗を流したいのよ。あたりに誰(だれ)もいませんから、あなたも一緒(いっしょ)に入って腕(うで)に摑(つかま)らしといて下さらない、怖(こわ)いから」

これは難題です。蘆(あし)の葉のそよぎにも息を殺す二人の身の上に取って、このくらい冒険(ぼうけん)はありません。見付かったら最後、二人はどんな運命になるか判らない。

昭青年は戦慄を覚えながら押し止めました。

「馬鹿をおっしゃい。昼日中、そんな危険な事が出来ますか。もし今夜、月が曇りだったら、闇を幸い、ここへ来て入れてあげましょう。それまで我慢するものです」

けれども姫は自分の云い出したすがすがしい計画から誘惑され、身体がむずがゆくなって一刻の猶予もなく河水に浸らねば居られぬ気持ちにせき立てられるのでした。

「あたくしの言う事はどうしても聴いて頂けないの」

姫の切なげな懇願に昭青年は前後のわきまえも無く

なって「では」と言って姫を川の中へ連れて入りました。

　青春は昔も今も変りません。二人は今の青年男女が野天のプールで泳ぐように、満身に陽を浴びながら水沫を跳ね飛ばして他愛もなく遊んでいます。あまりの爽快さに時の経つのも忘れていました。すると、いつの間にか寺の方の岸には僧達が並んで、呆れた声で騒ぎ出しました。

「昭沙弥じゃないか」

「水中でおなごと戯れとる」

「いやはや言語道断な仕儀だ」

三

僧たちはすぐ昭青年を摑(つか)まえて、裸(はだか)のまま方丈(ほうじょう)へ引立てて行きました。しかし、さすがに僧たちも、裸の姫には手を触れかね、躊躇(ちゅうちょ)している暇(ひま)に姫は**びっくり**して苫船の中へ逃げ込(に)み、着物を冠(かぶ)って縮んでいました。

僧たちの訴(うった)えを静かに瞑目(めいもく)して聴いていた住持三要は、いちいちうなずいていましたが最後に、

「判った。だが、昭公が一緒に居たのは、確(しか)と**おなご**

かな。鯉魚をおなごと見誤ったのではないかな」
「そんな馬鹿な間違いが」と、いきり立つ僧を押えて三要は言いました。
「おなごか鯉魚かわしが見んことには判らん。これは一つ昭公と大衆と法戦をして、その対決の上で裁くことにしよう。早速、鐘を打つがよろしい。双方、法堂へ行って支度をしなさい」
三要はこう言ってじろりと昭青年を見ました。もはや諦めて既に覚悟の態であった昭青年が、この眼に出会って思わず心に湧き出た力がありました。それは自分だけの所罰なら何でもない。しかし、沙弥とは言え、

寺門に属する自分を誘惑した罪科として、あのかよわい姫まで罰せられるとも知れない。これは一つ闘（たたか）おう。その勇気でありました。昭青年は思わず低頭合掌（がっしょう）して師を拝しました。その時、もう知らん顔で三要は座を立ち法堂へ急ぐ様子でした。

四

法戦が始まりました。曲彔（きょくろく）に拠（よ）る住持の三要は正面に控（ひか）え、東側は大衆大勢。西側に昭青年一人。問答の声はだんだん高くなって行きます。衣の袖を襷（たすき）に

結び上げ、竹篦（しっぺい）を斜（しゃ）に構えた僧も二三人見えます。もし昭青年がちょっとでも言葉に詰（つ）まったら、いたく打ちのめし、引き括（くく）って女と一緒に寺門監督（かんとく）の上司へ突出（つきだ）そうと、手ぐすね引いて睨（ね）めつけています。

大衆が入り代り立ち代り問い詰めても、昭青年はただ

「鯉魚」と答えるだけでした。

「仏子、仏域を穢（けが）すときいかに」

「鯉魚」

「そもさんか、出頭、没溺火坑深裏」

「鯉魚」

「這（しゃ）の田舎奴（でんしゃぬ）、人を瞞（まん）ずること少なからず」

「鯉魚」

「ほとんど腐肉蠅（ふにくよう）を来（きた）す」

「鯉魚」

これでは全く問答になっていません。大衆は**のっけ**に打ってかかってもいいようなものの、昭青年の意気込みには、鯉魚と答える一筋の奥（おく）に、男が女一人を全面的に庇（かば）って立った死物狂（しにものぐる）いの力が籠（こも）っています。大概（たいがい）の野狐禅（やこぜん）では傍へ寄り付けません。大衆は威圧（いあつ）されて思わずたじたじとなります。

そのうち昭青年の心理にも不思議な変化が行われて

来ました。はじめ昭青年は、問答に当って禅の古つわものとの論戦に、あれこれ言ったのではかえって言いまくられるであろうから、勝負は時の運に任して、幸い師の三要から暗示（ヒント）を与えられた鯉魚の二字を守って、守り抜（ぬ）こうと決心したのですが、どの問いに対しても鯉魚鯉魚と答えていると、不思議にもその調法さから、いつの間にか鯉魚という万有の片割れにも天地の全理が籠っているのに気が付いて、脱然（だつぜん）、昭青年の答え振りは活（い）きて来ました。青年は、あるいは「釜中（ふちゅう）の鯉魚」と答え、あるいは「網（あみ）を透（とお）る金鱗（きんりん）」と答えはするが、ついに鯉魚あるを知らず、おのれに身あるを知らず、

眼前に大衆あるを知らずして、問いに対する答えの速(すみや)かなること、応変自由なること、鐘の撞木(しゅもく)に鳴るごとく、木霊(こだま)の音を返すがごとく、活溌(かっぱつ)、轆地(ろくち)の境涯(きょうがい)を捉(とら)えました。こうなると大衆はだんだん黙(だま)ってしまって、ただただ驚嘆(きょうたん)の眼を瞠(みは)るのです。にっこりと笑った三要は払子(ほっす)を打って法戦終結を告げ、勝負は強いて言わずに、次の言葉を発しました。

「昭公が、いま、別の生涯あるを知ったのは、永い間、生飯を施(ほどこ)した鯉魚の功徳(くどく)の報いだ。昭公に過ちがあったのは、わしの不徳の致(いた)すところだ。まあ、この辺で事件は落着にしてもらいたい」

昭青年はこれを機として落髪（らくはつ）して僧となり、別に河辺（かわべ）に鯉魚庵（りぎょあん）を開いて聖胎長養（せいたいちょうよう）に入ったが、将来名器の噂が高い。

恋愛（れんあい）関係において一方が悟（さと）ってしまったら相手は誠に張合いの無いものとなります。悟るということは、生命の遍満性、流通性を体証したことで、一匹（ぴき）の鯉魚にも天地の全理が含（ふく）まれるのを知ると同時に、恋愛のみが全人生でなく、そういう一部に分外に滞（とどま）るべきでないとも知ることです。

そのうちに諭（さと）さなくとも早百合姫は、道に志ある身となって、しかし、これは逆に塵中（じんちゅう）へ引返し、舞（ま）いの

天才を発揮して京町の名だたる白拍子（しらびょうし）となりました。さす手ひく手の妙（たえ）、面白の振りの中に錆（さ）びた禅味がたゆとうとて珍重（ちんちょう）されたのは、鯉魚庵の有力な檀越（だんおつ）となって始終、道味聴聞（どうみちょうもん）の結果でありました。

　この後、住持三要は、間違いがあってはならぬというので、淵の鯉魚へ生飯を遣（や）る役は老体ながら自分ですることにしました。そこで淵の鯉魚は、再び、斎の鐘を聴くと寺前の水面に集って待つようになりました。

（昭和十年八月）

底本：「ちくま日本文学全集　岡本かの子」筑摩書房
1992（平成4）年2月20日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
入力：ゆいみ
校正：岩田とも子
1999年9月7日公開
2005年11月30日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。